◉韓国政府は12名の留学生らを全員即時釈放せよ！
◉日本政府は12名の留学生らの人権回復に努力せよ！

11.22通信

1981年 5月25日
第30号
1部100円＋カンパ
年8回発行
振替口座
大阪4649・摂津富田教会

編集・発行所
「11・22在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会」
大阪府高槻市富田町3－7－25
摂津富田教会（〒569）
電話 0726－96－2562

金東輝氏拷問を暴露

帰日政治犯、初のインタビュー

〝友人の釈放へ私も頑張る〟

「11・22事件」で捕らわれ、苦節四年余りの獄中生活を体験し、昨秋帰日を果たした元政治犯金東輝氏(26)は、このほど本紙とのインタビューに初めて応じられた。

幾多の身の危険をも顧りみず登場してくれた彼の勇気に深甚の敬意と謝意を表したい。と、同時に彼の衝撃のこの告白の重さをわれわれは改めて噛みしめなければならぬ。

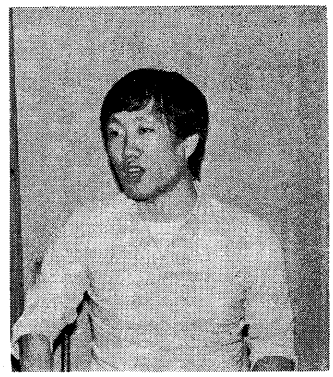
「全員釈放まで共に闘おう」という金氏の発言を銘記し、低迷する救援運動を新たな地平に引き出すことが、彼の勇気に応えるわれわれの責務であろう。（聞き手は本紙編集長）

発言通じ救援

―まずは帰日おめでとうございます。四月二十七日の大阪集会で初めてアピールされました。これまで七六年末の帰化三邦人の釈放以来、十六人の元政治犯が日本に戻っていますが、金達男氏(注1)を除けば、公の舞台に登場されたのは始めてで、それだけに政治犯救援運動の関係者は喜んでいます。この時期に、なぜ長い沈黙を破られたのか、その辺りからお話し下さい。

「私同様、帰ってきた元政治犯がなぜ発言しないかという第一の理由は、残された多くの獄中政治犯を気遣っているからです」「帰日して八カ月経ちましたが、この間私なりに残された友人の釈放を願い奔走してきました。そして、この前の3・3特赦にかなり期待を繋いでいたのですが、ご承知のように全斗煥発言(注2)で駄目になりました。出所の時、残された友人が私に向かって、『日本に帰ったら頼むぞ』と口々に叫んでいました。この言葉に応えるためにも、私自身が救援会の一員になって、運動を盛り立てるのが最善であると考えたからです」

「もう一つ付け加えると、六年間にわたって私たちのため頑張ってくれた皆さまに、ご挨拶とお礼が出来なかったのは非常に心苦しいものでした。四・二七は、遅過ぎた挨拶でしたが、やりおえるとホッとしました」



インタビューに答える金東輝氏

≪金東輝（キム・ドンヒ）≫
一九五四年、大阪東成区にて出生。二六才。一九七三年、上宮高を卒業。同年四月、ソウル大在外国民研究所に入学。七五年四月、カトリック医科大に入学。同年十月十三日午後、KCIAに連行される。逮捕時は二十才。十一月一日、ソウル拘置所に移送され、「11・22事件」で、「反共法」「国家保安法」「間諜罪」にて起訴される。七六年三月から始まった第一審では、懲役五年。第二審で四年に減刑され、同年十二月十四日に確定、直ちに大田矯導所に下獄した。そして、七九年十二月二十四日、刑期満了まで二週間を残し仮釈放された。翌八〇年十月二日、大阪に戻った。逮捕以来五年振りの帰日であった。

政治は無関心

―金東輝さんには伺いたいことが山ほどあるのですが、今日は紙面の都合上、特にここだけは聞きたいという質問に限定したいと思います。何ぜ高校を卒えて直ぐ韓国に留学されたのですか?

「高校三年の夏に、民団主催の夏季学校に応募して二週間韓国を回りました。それまで全く日本人として生きていた自分が、この旅行で韓国人としての自覚に目覚めたのが契機です」

「また、日本では差別のため就職ができないということもあり、郷里の済州島で医師になるのが夢でした」

―留学の頃の金さんの意識状況は?

「政治意識のことですか?当時の私は全くといっていいほど政治音痴でした。11・22事件では優秀な留学生が大勢捕まりましたが、私などは出来の悪い方でその末席を汚しているようなもんです」

「こういう話があります。七三年秋、十八歳の私はソウル大の中にある〝語学研究所〟に通っていたのですが、その時本国の学生デモがありました。大学はそれで休校になったのですが、私は遠まきにデモを見ながら、『授業進度が遅れる』と真顔で心配したほどでした。ところが後でCIAに連行された時、このことが、『ソウル大デモを見聞し、〝韓国内では日夜革命状況が醸成しつつある〟という極秘報告を北韓（朝鮮）間諜に漏洩した』とされました。バカバカしい話ですが……」

デッチ上げだ

―そのことと関連してですが、逮捕されたのはいつですか。

「カトリック医大一年の七五年十月十三日に大学構内から連行されました。留学生の連行は九月末頃から相次いでいたそうですが、その頃の私はアパート住まいで、仲間と疎遠で情報が入っていませんでした」

「最初は逮捕の理由は全く分かりませんでした。先ほど述べたように、政治には興味なかったし、疑われるようなことは務めて避けていましたので」

―中央情報部での取調べ内容はどういうものでしたか?

「主に白玉光氏との関係を追求されました。CIAは、白氏を〝スパイ〟と断定したうえで、彼から指令を受け、国家機密や軍事機密を流していただろうというものでした」

―実際はどうでした。

「ひどいデッチ上げで、事実無根です。白氏とは、大阪市東成区で近所同士で、彼は民団の職員でもあったから自宅に団費をよく集金に来ていました。そんな関係で、留学の頃には手続きの相談にも乗って貰い、冬や夏の休みには、私から連絡して近くの喫茶店で何度かは会っていました。ただそれだけの関係です。しかしCIAでいくら説明しても駄目でした」

情報部の拷問

―取調べの過程でやはり拷問はありましたか

「CIAでは結局十九日間泊められたのですが、毎日が暴行と脅迫の連続でした。第一、拷問しないCIAなど、韓国では誰も信じません」

―もしよろしかったらその具体的な実態をお話し下さい。

「情報部でのことはいま思い出しても身震いするほど異常な雰囲気です。最初に自分が〝スパイ〟であることを認めさせるため、三日三晩眠らせず全身を殴られました。二人の取調べ官から拳で顔面を殴られ、腹部や太股（ふともも）を蹴られ、次に棍棒で身体のあらゆる部分を打ちのめされました。歯が折れて口の中が切れ、全身が内出血で腫れあがりました。大体、一日十時間から十五時間の取調べが続きました。その間着たきり雀で、下着も着換えさせて貰えず、風呂も入れられませんでした」

―最もきつかった拷問は?

「床の上に正座させ、両膝の後ろに棍棒を挟み二人がかりで上から押さえつけてきました。気絶する位痛かったです」

「一つ強調しておきたいことがあります。それは、〝11・22事件〟では、私が最年少で有期刑では最も軽い刑（四年）であったということです。即ち、拷問も私の場合は最も軽い部類だったと思います。CIAのレベルからいえば、私の受けた拷問は拷問の枠に入らないのではと思います」

「刑務所で、在日や本国の政治犯と話し合った時、彼らへの拷問の凄じさに比べれば、大したことではありません」

皆、精神錯乱に

―他の拘束者への拷問はどうでした

「その質問に答えることは留保させて下さい。いつの日か明らかにされることでしょうが、いま私が発言すれば、彼らに不利益と迫害を生じる危険があります」

「ただ従来から言われている、電気、水、飛行機、薬物、等の拷問は事実です。CIC（陸軍保安司令部）はもっと酷い。女性も例外ではありません。CIAの取調べ室は、全て防音装置が付いていますが、二十四時間断末魔のような悲鳴が続いていました」

「私もそうですが、殆どの拘束者が精神錯乱を起こし自殺を図りました。頭を壁面に打ちつけたり、舌を噛み切ろうとした留学生は少なくありません。あの状況で虚偽の自白をしたのは、悔いは残りますが、いまでもやむを得なかったと思います」

―CIAでの過酷な取調べから解放され、ソウル拘置所に移されたわけですが、少しはましでしたか?

「私は若いながらも、私なりに父母の生地である祖国に貢献しようと小さな胸を一杯にふくらませて留学して来ました。しかし、その祖国は、暴力と脅迫で私に屈辱的な〝スパイ〟の汚名を被せました。拘置所の第一日目、私は絶望といいようのない人間不信に陥りました。差し入れも入らず死刑にするなら早く執行しろと思ったものです」

「入所して四日目、看守がタオルと歯ブラシとリンゴを一個持ってきました。四室離れた房にいる緊急措置違反の国内の学生からの差し入れでした。その時、私は韓国でも信じられる人間がまだ残っていることに、涙を流して喜びました」

獄中に真実が

―裁判はどうでした。

「全くの茶番劇です。私は検事にも殴られました。裁判長も弁護士も信用できません。CIAの言いなりです。だから、裁判では何を言っても仕様がないと、皆思いました」

「日本では信じられないことですが、韓国の裁判では自白調書が全てに優先するのです。例えば、北行きの件では、物的証拠やアリバイが出され客観的裏付をしても、『本人が言っているのだから間違いない』という論法で押し切られるのです」

「また裁判所ではCIAがいつも立会い、無言の圧力を加えていました。裁判中でも不穏当な発言をすると拘置所には戻されず、CIAやCICに直行し、また拷問されます」

―刑務所の生活はどうでした

「ソウル、大田と四年三カ月間

（2面下段につづく）

水上領事、柳氏と面会

獄中テロを調査―馬山矯導所

前号で既報のように、柳英数氏(31)＝無期懲役、和歌山市＝が馬山矯導所内で看守らから獄中暴行を加えられた事件は、全国の政治犯家族や救援会を震感させたが、このほど救援会や家族の渡韓でその真相が更に明らかになった。

それによると、三月十四日、洗面場の順番を待っている時、看守の一人が、「早く入れ」と柳氏を蹴とばしたのが事件の発端であった。柳氏が抗議の意を込めてニラミ返すと、今度は「生意気だ」と他の看守も加わり殴る蹴るが続いた。その後、保安部長が現れ、今度は弁護士専用の接見室に連行された。柳氏はそこで、鉄の鎖で身体を縛られ、手錠をかけられた。

そして、保安部長ら三人が棍棒を使い全身を殴打したのである。

白昼リンチの後に部屋に戻された柳氏は、同房の拘束者らの協力のもと、医務課長の診察と保安課長の面談を要求したが拒絶された。ハンストで抗議すると、暴行の傷口の治療がまず認められたが、保安課長は、謝罪する必要はないと突っぱねた。

更に三度、課長との面談を要求した。この頃外部にもこの事実が伝えられ日本大使館を始め、問い合わせが相次いだため、課長は柳氏の申し入れを、暴行を加えた三人の看守らの処罰を求めないことを条件に、ほぼ全面的に呑んだ。

五月六日、家族と面会した柳英数氏は「今回の事件で、救援会や日本大使館の助力に感謝します」と、暴行の傷痕もほぼ癒（い）え元気そうに語った。

矯導所内では、この事件を契機に拘束者らへの待遇改善が、徐々にではあるが進行している、という。

なお、矯導所当局は、柳英数氏の結核性肋膜炎が完治しているとして、近く光州矯導所に再移監することを示唆した。

◇　◇

柳英数氏が獄中で暴行さる、という衝撃のニュースは、日本外務省も一時は狼狽させたようだ。土井たか子代議士からの緊急要請を受けた外務省は、駐韓釜山総領事館に調査を命じた。

四月十一日（既報の三月末は誤り）、同領事館の水上精治領事は馬山矯導所に出向いた。水上領事は、まず矯導所長から事件の顛末を聴取し、次に柳英数氏との面会を要求した。所長は「前例がない」と一担拒否したが、渋々認め、約十分間の面会が実現した。

これまで日本人外交官が、在日韓国人政治犯と面会したことはなく、救援会では「この面会が、対政府交渉の今後の突破口になるのでは」と期待している。

（スケッチは柳英数氏）

断鎖

福井の敦賀原子力発電所の取材から帰ったばかりの新聞記者に話を聞く機会があった。既に明らかにされた原電のズサンな核管理や事故隠し体質に加え、その友人が指摘したのは、大阪などからかき集めた日雇労働者群＝『特攻隊』による汚染物処理の実態と被曝（ばく）の恐ろしさだった。文字通り労働者を『使い捨て』にする資本の本質的な非人間性がそこに露出している。被曝の怖さのひとつに、放射能が我々の五感では感知できない、即ち『見えないもの』の怖さがあり、気づかないうちに身体が蝕まれていく★管理社会の度が強まるにつれ、我々のまわりには『見えないもの』見えにくいものが多くなった。成田立法や大地震対策を口実にした治安有事体制、マスコミの翼賛報道で戦争犯罪（責任）を消し去ろうとしている天皇制もそうだ。そして在日韓国人政治犯の問題★最近ある集会で火種プロの映画『自由光州・1980年5月』を見た。歴史の大きなうねりの中で嵐にもまれる小舟のように翻弄されながら、なお消し難い人間の尊厳を賭けて発せられる民衆の叫び。自由への渇望★二千余人の生命を、カボチャか虫ケラのように奪い去った者たち。手を下した者と背後にいて自らの利益のためにその蛮行を支持した者たちを、富山妙子の版画が、高橋悠治の音楽が撃つ。そして『金大中氏の命を救ったから我々の勝利だ。日本に生まれて良かった』式の感性しか持ち合わせていない日本人の運動をも撃たずにはおかない★『〝はじけ！鳳仙花〟は光州で倒れた人々に捧げる私たちの献花でもあり、受け手と作り手とが共に出会い、光州で沈黙させられた……声を伝えてゆきたい』と富山が書いているように、見えにくくなった現代社会でこそ、真の民衆の声を発する力、受けとめる感性が磨かれなければならないと思う★その集会を準備した在日の青年たちの思いもそこにあったのではなかろうか。国家・民族を超えて、民衆を抑圧する者たちを許さない新しい社会関係を築く足がかりは、まず自分を『見る』ことだろう。

第2期全国総行動
5・30に全国結集

在日韓国人政治犯釈放へ更に強力な弾みを、と「第二期死刑執行阻止全国総行動」が、現在各地で急速に展開されている。

東京では、総評の後援で全国十六県評の組合に「統一署名」が回わされているほか、地域や学園などでも多様な救援行動が取り組まれている。中央レベルでは、五月二十七日、豊島区の豊島公会堂で集会を持ち、三〇日には対政府行動が行われることが決まっている。またこの日の午後二時から桧町公園で屋外集会が開かれ、その後韓国大使館までデモをする。夜の交流集会は、午後六時から豊島区民ホールで持たれる。

関西でも、徐々に署名が集約されてきた。去る四月二十七日には、前段の決起集会が北区のPLP会館で行われ、百五〇人が参加した。この集会には、帰日政治犯の金東輝氏（26）が初めて登壇し、「救援運動への謝意」を表明、激励の拍手を受けた。

また五月五日には、南区のナンバ駅前に約五〇人が集まり、夕方までビラ入れと署名を行い、その後、韓国領事館まで風船デモを行った。

なお、五月三〇日の対中央行動には、関西から約五〇人が上京する予定。

これら一連の総行動の取り組みに、多くの人が参加し支援してくれるよう、救援会では望んでいる。

5月5日、大阪韓国領事館への風船デモ

ハンストで抗議！
―死刑囚の手錠改悪―

先頃、ソウル拘置所の死刑囚全員に科せられていた手錠がよりきつい新しいものに代えられたが、拘束者は一斉に反発、ハンストに訴えるなどで従来のものに戻させることに成功した。

白玉光氏ら死刑囚は、自殺防止を理由として、これまで二十四時間手錠をかけられるという非人道的な処遇を課されていた。

ところが去る三月初旬、これまでのものより手首の間隔が短くまた重い頑丈な手錠に代えられた。康宗憲氏など、一時は「これでは洗濯もできない」と不満を露わにしていた、という。

そして死刑囚らが改善を要求して一斉にハンストを行うと、驚いた拘置所当局は早速その要望を呑み従来のものに戻したという。

清州保安監護所
食べ物入る？

清州保安監護所の徐俊植、姜鍾健両氏に、救援会が食物の差し入れを、最近申請したところ、あっさり認められたという。

保安監護所ではこれまで食料品の差し入れを一切許可していなかったため、「11・22救援会」などでは抗議ハガキを集中させ、その非道な措置の撤廃を強く要求してきた。

しかし、両氏の領置金が殆ど減っていないことから、「実際には本人の手許に届いていないのでは」といぶかる声も強い。

「康宗憲事件」
朴氏既に釈放

「康宗憲事件」で連座逮捕され、懲役五年の刑が確定していた朴鍾烈氏（30）＝高麗大出身＝の消息が判明した。

朴氏は七六年三月光州矯導所へ下獄、八十年初めの緊急措置撤廃に伴い徐光兌氏ら他の本国政治犯が出所したにも拘らず、彼のみ非転向を理由に釈放リストから外されていた。

今回の「11・22救援会」の調査によると、同氏は八十年七月に全州矯導所へ移監され、本年一月二十八日釈放された。満期出所と思われる。

なおこれで、「11・22事件」に連座した本国関連者は全て釈放されたわけだ。

渡韓報告

「11・22救援会」事務局から、健康状態が憂慮される拘束者の調査のため渡韓してくれないか、と打診された。これまで取り立てて救援活動の実績のない私に白羽の矢がたてられたのは、医師という私の職業が与っているらしい。

一度は固辞したのだが、強引に説き伏せられてしまった。しかし、行くと決まった以上、万全の準備をと俄勉強に励んだのだが、これは後になってわかったが、やはり付焼刃に終わったようだ。

今回の渡韓の目標は、結核性肪膜炎を患い馬山矯導所の病棟にいる柳英数氏である。柳氏は、三月に獄中暴行を受けているということもあり、その様子が危惧されていた。

五月七日、〃柳英数氏を救う会〃の二人と共に、釜山の日本総領事館に行った。ここには、日本外務省の訓令で柳英数氏と面会した水上領事がいる。領事に柳氏の状況を伺い、今後の助力を要望する。その後、すぐ高速バスで馬山に向かった。

矯導所の門前で、柳英数氏の家族と落ち合う。四人で庶務課に通されたが、ここで家族だけは別室に連れて行かれた（後で、英数氏との面会であったことが分かった）

所長が現れたが、面会は許可できないと突っぱねてきた。私たち三人は、それでは約束が違うではないか、と頑強に抗議した。実は、柳英数氏への暴行後、所側は謝罪の意も込めて、次回には日本人医師との面会を約束していたのであった。担当医務官も不在だという。それでやむなく、医務課員が持参した柳英数氏のカルテの検討を始めた。

カルテも詳しく見てメモを取ることが許されず、何よりも肝心な診察及び検査所見が空白というズサンなものだった。

ただX線写真のスケッチが五～六枚と血圧の測定値が出ていた。

胸部X線写真スケッチについて記す。七八年二月（ソウル拘置所）のものは左肺下半分に胸水が貯留しているが、七月以後のものは胸水は消え左肺下側部の陰影が縮少し、肋膜の肥厚を残し治癒（ゆ）していた。

しかし、八〇年六月の分には、左肺外側部に大きい陰影が現れ乾性肪膜炎が再発している。この時期は、光州から馬山へと移監された頃である。馬山では、（日本から差し入れた）リファマイシを注射し、ヒドラジドとカナマイシンを投薬している。これは結核に対する治療である。同年九月のスケッチでは、陰影がほぼ消えている。このため、所長は「医務官は〃完治した〃と言っている」と強調し、光州に再び戻すと言明した。

しかし、病勢をチェックするための血沈、喀痰の結核菌検査（塗沫、培養）や薬剤耐性検査、等のデータがなければ完治したとはいえない、と追求した。すると所長は、「喀痰は、四月六日、道立病院に検査に出し、異状なしの電話があった。後の検査は近く判る」と取りつくろうように答えてきた。

その後もいろいろ押問答を繰り返し、最後に私たちは、慎東仁さんの獄死が日本では非常にショックであったこと、矯導所内で余り健康に対する配慮がなされていないこと等を伝え、今後医療施設で二度とこのようなことが起こらない様に申し入れ、矯導所を出た。

……………

金勝孝氏
〃暴力的拘禁にはもう耐えられず〃

五月八日、早朝から光州矯導所に到着した。どういうわけか、差し入れがことごとく拒否される。所長もいないと言う。昨年からの差し入れや面会の事実を訪問者の名前を一人一人出しながら談判した。「納得のいく話を聞かない限り絶対に帰らん」と三人が大声をはりあげた。立命大の木村教授の手紙が効いたのか、語勢のためか、相手側は一転して、私だけを所長室に案内した。

私は所長に次のような申し入れを行った――

金哲顕、金勝孝両氏の拘禁性精神症状の悪化が日本で非常に憂慮されている。にもかかわらず金哲顕氏は独房で手錠をかけられているというが、余計に悪くなるばかりだ。二人の精神症状を少しでも改善させるため、拘禁をゆるめ所外見学など増やしてほしい。彼らの心をほぐすため、日本の友人の面会や手紙を許可してほしい――

黙って聞いていた所長は、「参考にしよう」と言い、所長室に係官を呼び、本、お金、等の差し入れを許可してくれた（二日前に先行した大阪の二人は殆ど差し入れできなかった）。また、所長は、「一月、二月に来た人たちには悪いことをした。緊迫した状況だったので許してほしい」と謝まり、信じられないことに金勝孝氏との面会をも許そうと言った。

外のメンバー一人も加え、私たち二人は構内に案内され、管理舎の二階の応接室に通された。

金勝孝氏の担当を昨年までやっていたという日本語の分かる係官が立ち会った。

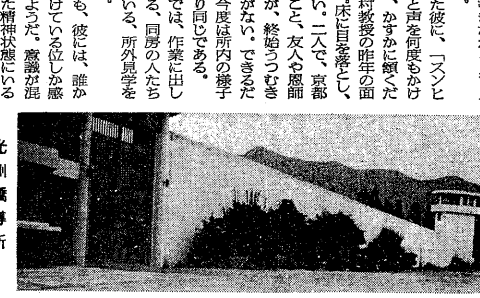
ドアーが開き、青い囚人服、坊主頭、眼鏡を鼻まで垂らした金勝孝さんが、うつむきながらノロノロと入って来た。

ソファに座った彼に、「スンヒョさんですか」と声を何度もかけるが応答はなく、かすかに頷くだけであった。木村教授の昨年の面会とほぼ同じだ。床に目を落とし、身動きが殆どない。二人で、京都のこと、大学のこと、友人や恩師のこと等を話すが、終始うつむき反応らしい反応がない。できるだけ間をおいて、今度は所内の様子を問うが、やはり同じである。

係官の人の話では、作業に出しても皆から離れる、同房の人たちの世話になっている、所外見学を嫌がる、そうだ。

私たちの言葉も、彼には、誰かが自分に話しかけている位しか感じられていないようだ。意識が混迷しハリを失った精神状態にいるように見える彼が、立ち直れる可能性があるとすれば、一刻も早く拘束状態から解放し、彼のことをよく理解している近しい人や肉親の元に戻し静かな生活をさせてあげることであろう。また、開放的雰囲気のもとで、理解ある精神科医の治療を受けさせねばならない。精神科が専門でない私でも、彼をこのまま放置すれば人格荒廃が一層進むであろうことは、間違いないと思う。厳しい見方をすれば、廃人の一歩手前といえるかも知れない。

勝孝さんと面と向かいあいながら、私たちは自らの無力さを思い知らされた。どれ程の時間が経っただろうか、所長室に戻り、改めて、金勝孝、金哲顕両氏へのできる限りの配慮を、繰り返し、繰り返し要望した。（T・S）


光州矯導所

（1面下段からのつづき）

刑務所生活を過したわけですが、その待遇は地獄のようです。貧弱な食事、少ない運動時間、それに房内の不潔さは犬小舎よりも酷いです」

「救いは、獄中生活で非常に立派な人々と知りあえたことです。大田では、反共法や保安法違反で二十、三十年間閉じ込められている政治犯が沢山いましたが、いずれも人間的に素晴しい人ばかりでした。緊急措置違反の国内の学生や活動家とも兄弟のような付き合いをしました。真の韓国はここに存ると思いました。何しろ、刑務所の中に一つの大学が出来るほど元教授がいました。その意味では、私は大学こそ行けませんでしたが、人生で最も輝いた時期を過したかも知れません」

「捕らわれた頃は身の不運を嘆き、夜毎夜毎泣きましたが、今となっては、二度と味わえないその体験が非常に貴重なものと思えます」

民主化は必至

―話は少し横道にそれますが釈放されて約十カ月間韓国に滞在していた訳ですが、韓国の直面する状況などもお話し下さい。

「八〇年十二月末から、八一年九月一杯までソウルで帰日のため待機していました。この時期は、朴大統領射殺後の混迷期から、ソウル決起、光州事態、全斗煥将軍の台頭、それに金大中氏の裁判等が連続してありました。このため四月に情報部員が私をホテルに呼びつけ調査したほどで、帰日時期もこれで遅れました」

「激動の韓国でしたが、韓国民衆の闘いは決してやむことがないと思い、感激しました。いまは民主化をのぞむ声は力で圧殺されているように見えますが、刑務所の中で活動家らが、『正義の闘いは必ず勝利する』と断言したのを私はいまも確信しています」

「日本に帰ってから、家族や救援会が金大中氏を始めとして韓国の民主化支援の人士と密接な連絡を取りあって救援運動されている現状を知り、感動しました」

「それと関連しますが、金達寿氏らが渡韓して『いまの韓国批判は実状に合わない』などと言っているのは許し難いことです。たかが一週間、それも当局の決められたコースを回って一体何が理解できたのだろうか。私は、韓国に表で四年間、裏で四年間過し、始めてその実情をしりえたと思っています。軽々しい推断で韓国民衆を後足で砂をかけるようなことはしてほしくない」

差入れに感謝

―日本では、「11・22救援会」をはじめとして、在日韓国人政治犯救援運動が続けられていますが、獄中でこの事実をご存知でしたか

「勿論、知っていました。裁判所にはかなり沢山来ていました。他の出廷者と『励まされるなァ』と喜んだものです。ソウル、大田と数え切れないほど差し入れを頂き、お礼の言葉もないほどです。差し入れ伝票の名前で、どんな人が来ているのか想像するのが楽しかったです。今後もできるだけ続けて下さい。これは私からのお願いです。救援の少ない人ほど、精神的に参っているようですから」

釈放へ頑張る

―今日は大変ありがとうございました。しかし、金東輝さんがこのインタビューに答えてくれたことで、在日KCIAや民団サイドから圧力や脅迫があるのではないでしょうか。私たちもできるだけ金さんを支援して行きますが……

「もとより覚悟しています。でも、私は一度死んだ人間です。KCIAの七階の取調べ室で、苦痛のため何度も飛び降りようとして果たせませんでした。それにいまも獄中の友人が夢枕に現れて『お前は自由なのに何もせんのか！』と叱られています。そんなことから妨害など来るなら来い、という心境です。私が行動することで、救援運動が少しでも前進することを願っています。とに角友人を一日も早く釈放させるため救援会の皆さまも、シンドイと思いますが、もう一度私と共に頑張りましょう！」　（了）

《注1：死刑が確定した在日韓国人元政治犯。七七年十二月に特赦で釈放されたが、帰日後、民団主催の集会等で積極的に維新体制を擁護し、獄中政治犯や救援界から総反発を受けた》

《注2：今年三月三日の大統領就任特赦では、在日政治犯が大量に釈放されるとの確度の高い情報があったが、全大統領は二月二十三日の昼食会の席上、「左翼はだめだ」とこの動きを一蹴した》

領置金アップ
―物価高に悲鳴―

韓国の物価高騰は遂に刑務所へも波及してきた。物価上昇率がここ数年三〇～四〇％にものぼり、庶民の生活を圧迫しているが、つれて各矯導所の領置金の上限額も昨年末頃より波状的に改められた。

従来は各刑務所とも、差し入れは一回一万ウォン、一ヵ月十万ウォンが限度であったが、それぞれ二～三万ウォン、十五～二十万ウォンとなった。

「11・22事件」発表当時は、一回五千ウォン、一ヵ月五万ウォンだったから、この五年間で六倍にもなったわけだ。五十ウォンの大福モチが今では四百ウォンもするので、拘束者たちもびっくりしている。

それにしても、毎月七～十二万ウォンもの領置金を差し入れねばならぬ家族や救援会ではこの上昇ぶりに呆れ返っているが、「早く釈放してくれなければ、こちらが参る」と悲鳴をあげている。

救援短信

◎この通信も30号を迎えました。その記念すべき号に、金東輝氏のインタビュー記事が載せられたことを感謝します。本当は四面にして、ボツになった分も全部掲載したかったのですが、経済的理由で御破算になりました。ご了承下さい。

◎救援カンパを切にお願いします。もうこのままでは、ニッチもサッチも行かなくなりそうです。カンパが駄目な方はこの通信の読者になって下さい。一年間二千円です。カンパ、通信代の振込みは、郵便振替、**大阪　4649　摂津富田教会**まで。